

Ami-go TIME



～学生時代の時間を大切に～

なぜ阪南大学に就職したのか？

最初は阪南大学は就職先と考えていませんでした。就職活動している時に一社内定を貰っていて、全国勤務のある会社でここに就職すると考えていて。阪南大学職員の募集がある事も知っていたけれど、無縁の話だと思っていました。ところがゼミの先輩、先生、キャリアアセンターの方に声を掛け頂きました。

それと、実は当時身内の不幸があったんです。弟が小学校6年生で親が片親しかいない中、自分が全国勤務で家を空ける不安と弟の側に居てあげたい気持ちが強くなりました。自分自身もショックが大きく一時期大学も行けなくなりました。自分自身を奮い立たせる意味もあり、チャレンジする事にしました。

もう一つ、阪南大学が本当に楽しかったからという事もありました。実際に振り返ると大学生活が純粹に楽しく、友達はもちろん勉強も楽しく色々な経験もたくさんできたと感じました。授業のことなどで教務課に相談に行ったら、自分がやりたいと思うたら協力してくれるスタッフの方々がいました。大学職員との距離が近くてやりたいことができるから楽しい。職員になればこういう経験をもちと後輩たちにさせることができると思いました。楽しかったと胸を張って卒業できた阪南大学に就職できるっていうことは、こういう気持ちになつてくれる学生を一人でも多く増やせる可能性があるし、何か大学生活が楽しくなるきっかけを作れたらいいなと考えた事も就職した理由のひとつかな。

網さんが阪南大学に進学した理由

高校のときに経験した挫折っていうのが、大学進学を考えるきっかけになりました。サッカー推薦で高校に行つて、怪我也あつて、サッカーを辞めて、高校も途中で辞めようと思ったときもあつて。その時に周りの高校の先生が「大学進学」っていう考えもあると聞いてくれ、それでサッカーを辞めてしまったけど高校まで辞めずにとどまられた。大学選びのとき、絶対自分の力で行き、極力費用がかからないところを考えていました。高校卒業して社会人になるっていうのも想像してなかったから、やりたいことを見つけてる為に大学に行こうかなと考えていたので、阪南大学の楽しそうな雰囲気になれ、入学しました。

学生時代の過ごし方

今は各学部で学生組織があるけど、僕らの時代はなくて。非公式だけど、自分たちでアウトドアのサークルを作って、15人くらいでいろんなところに行つて活動しました。恒例なのは毎年夏に吉野川にBBQに行くことでした。一週間野宿で四国一周を自転車で行つたり、結構外に出ましようとして企画していました。

在学生に一番伝えたいこと

いろんな事を経験して、いろんな失敗をして、いろんな成功をしていろんな人と関つたら、自然と豊かになるし、人間的な幅も広がると思うし、就活のときも困らないと思う。とりあえず動くことが大切です。何かしたいこととか、興味を持ったこととかあればやってみようから、チャレンジしてほしい。僕は考えたこととかやりたいと思つたことはなんでもやつてこれたから、社会人になったときに「あれやつとけばよかった」とかはあんまりないんです。学生時代に面倒とか時間がないっていういい訳だとかネガティブな言葉は出さないほうがいいですね。遊びだったから遊びでも良いし勉強だったら勉強でも良いから、思ったことをなんでも形にしていく行動をしていったほうが良いと思う。大人になったら制約がいろいろあるから、学生の間にできることをしたほうがいいと思えます。後は、常に自分へ問いかけること。物事を進める前にきつちりと考えて、自分自身を弱い方に流れないようしつかりと問いかける事も大切だと思います。

勉強面では、二年の時に学部一厳しいといわれていた先生のゼミに入りました。実際やつたことに対して、良いか悪いかはつきり言ってくれ先生でした。三年に進級するとき、その先生が海外へ研究に行かれることになり、ゼミを変更しなければいけなくなりました。新しいゼミでは、ゼミ長をさせてもらいました。授業はゼミ長が中心になって、先生から与えられたテーマに沿って授業内容を考え、足りないところや、問題が発生した時だけは先生が指導してくれるスタイルでした。

授業課題で、ジェルネイルの光を当てる機械の販売促進を考えた時は、ジェルネイルの基礎知識を勉強したり、実際にジェルネイルもしたりして楽しんでいました(笑)。そのことを大学内の懸賞論文のプレゼンテーション大会で発表してたところ、優勝したんです。時間をかけて自分たちで作り上げてきたから、それに対しての自信がすごくあつて、質疑応答もスラスラと応対でき、賞をいただけました。

実際に行動に起こして、自分の頭でデザインしたものが結果として出てくるのが、とても面白くなりました。

プロフィール

網 大輔 28歳
 阪南大学経営情報学部出身
 阪南大学職員
 趣味 アクティブに活動すること
 TEXT BY 上田くるみ 池田生穂
 (阪南大学流通学部)



後列一番左 網さん